HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	韓国語の動詞「pota」の「認識的モダリティ」としての用法
著者	李，鳳
引用	北海商科大学論集，10(1)：1-14
発行日	2021-02-20

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

 受理日:2021/02/20

韓国語の動詞「보다(pota)」の「認識的モダリティ」としての用法
Usage of "Epistemic Modality" of the Korean Verb "Pota"

李 鳳 LEE, Bong

要旨

韓国語の単語「보다(pota)」は、一般に視覚行為を表す動詞とされている。また、「보다(pota)」は視覚動詞から認知動詞へ意味拡張が行われていることが知られている。これまで韓国語の動詞「보다(pota)」に関する研究は、動詞としての用法の他にモーダルとしての用法に関しても議論されてきている(최현배(1980)、서정수(1996)、손모세돌(1996)、박선옥(2005)など)。しかし、「보다(pota)」がどのようなモダリティとして分類され、どのような性質を持つかに関しては詳しく論じられていない。そこで、本研究では主に Coates(1983)の「認識的モダリティ不可侵性の原理(Principle of the Inviolability of Epistemic Modality)」を用いて、韓国語の「보다(pota)」のモーダルとしての用法が「認識的モダリティ(epistemic modality)」の性質であることを、5 つの論拠を挙げて示した。

キーワード:「보다(pota)」、認知動詞、モーダル、モダリティ、認識的モダリティ

Abstract

The Korean word "pota" is generally regarded to be a verb used to represent a visual act. It is also understood that the meaning of "pota" can extend from being a visual verb to also being a cognitive verb. So far, research on the Korean verb "pota" has involved debate regarding its usage as a verb, as well as its usage as a modal (Choihyenpay, 1980; Secengswu, 1996; Sonmoseytol, 1996; Paksenok, 2005). However, until now there has been no attempt to determine the kind of modality under which "pota" should be classified, nor any attempt to clarify its underlying characteristics.

This study, using the "Principle of the Inviolability of Epistemic Modality" (Coates, 1983) as its main methodology, reveals that the Korean word "pota" has five underlying characteristics that enable it to be classified as having epistemic modality.

Keywords : "pota", cognitive verb, modal, modality, epistemic modality

1. はじめに

韓国語の「보다(pota)」は、一般に目で感じる視覚行為を表す動詞とされている。また、「보다(pota)」は、視覚動詞から認知動詞へその意味が拡張されていることが知られている。次の例を見てみよう。

(1) a. 나는 친구하고 영화를 봅니다.
na-nun chiingu-hako yenghwa-lul po-pnita.
(私は友人と映画を見ます。)
b. 다음은 우리 순서가 될 것으로 본다.
taum-un uli swunse-ka tol kes-ulo po-nta.
(次は私たちの順番になると思う。)

(1a)の「보다(pota))」は、語彙的に最も基本的な視覚の意味を表す。一方、(1b)の「보다(pota)」は、例えば、「생각하다(sayngkak-hata)」や「추측하다(chwuchuk-hata)」のような予測する表現に置き換えることができ、視覚動詞から認知動詞へ意味拡張が行われていることがわかる(이수련 2013)。

これまで韓国語の動詞「보다(pota)」に関する研究は、1980 年代以降、本格的に研究が始まり、動詞としての用法の他にモーダルとしての用法に関しても多くの議論がなされてきている(최현배 1980,이기동 1988,서정수 1996,손모세돌 1996,박선옥 2005 など)。しかし、「보다(pota)」がどのようなモダリティとして分類され、どのような性質を持つかに関しては明確に論じられていない。そこで、本研究では、韓国語の「보다(pota)」のモーダルとしての用法が「認識的モダリティ(epistemic modality)」として分類され、その特徴があることを明らかにすることを目的とする。そして、Coates(1983)の「認識的モダリティ不可侵性の原理(Principle of the Inviolability of Epistemic Modality)」を用いて、韓国語の「보다(pota)」に「認識的モダリティ」としての特徴があることを論じる。

本稿の構成は次の通りである。まず、第 2 節で韓国語の動詞「보다(pota)」のこれまでの研究を概観する。次に、第 3 節では、「モダリティ」の性質を簡単に概観し、「認識的モダリティ」の特徴について、特に Coates(1983)の「認識的モダリティ不可侵性の原理」を取り上げて説明する。第 4 節では、韓国語の「보다(pota)」が「認識的モダリティ」としての属性を持っていることを、論拠をあげて示す。最後に、第 5 節では、まとめと今後の課題について述べる。

２．先行研究

まず、韓国語の動詞「보다(pota)」の辞書的な意味から確認しよう。ハングル学会（1992：1794）は、動詞「보다(pota)」の辞書的な意味を次のように述べている。

(2) a. 눈으로 느끼다. nun-ulo nukita.
(目で感じる)
: 앞을 보고 걷다. aph-ul po-ko ket-ta.
(前を見て歩く)
b. 헤아리거나 살피다. heyali-kena salpita.
(推し量ったり、調べたりする)
: 형편을 보다/맛을 보다 hyengphyen-ul pota./mas-ul pota.
(都合を見る/味見をする)
c. 어떻게 여기거나 평가하다. ettekey yeki-kena phyengka-hata.
(物事を考えたり、評価を下したりする)
: 사람을 만만히 보다. salam-ul manmanh-i pota.
(人を甘く見る)
d. 겪어 내거나 치르다. kyett-e nay-kena chluta.
(経験したり、受けたりする)
: 시험을 보다. sihem-ul pota.
(試験を受ける)
e. 채비를 하다. chaypi-lul hata.
(用意をする)
: 잠자리를 보다.(寝る用意をする)
f. 장에서 물건을 사거나 팔다. cang-eyse mulken-ul sa-kena palta.
(市場で物を買ったり売ったりする)
: 장을 보다. cang-ul pota.
(買い物をする)
g. 참거나 그대로 두다. cham-kena kutaylo twuta.
(忍耐したりほっておいたりする)
: 보자보자 하니 별일이 다 있다. pocapoca ha-ni pyelil-I ta iss-ta.
(我慢していたらとんでもないことが起こる)
(日本語訳とローマ字表記、下線は筆者による。以下も同様である。)

上記の(2a)～(2g)が示しているように、韓国語の「보다(pota) 」の辞書的な意味は、多岐にわたっており、いろいろな意味を持つことが解る。이수련(2013)は、本動詞としての「보다(pota)」は語彙的な意味(lexical meaning)を持ち、本来、視覚動詞から認知動詞へ意味拡張が行われたものであると論じている。

韓国語の「보다(pota)」に関する研究は、大きく本動詞としての用法を取り扱ったものと補助動詞としての用法を取り扱ったものの 2 つに分けられる。そして、本動詞としての用法より補助動詞としての「보다(pota)」の用法にもっと注目して研究が行われてきている

(이기동(1988)、최현배(1991)、호광수(2003)、박선옥(2005)など)。박선옥(2005)は、本動詞としての「보다(pota)」の原型的な意味は「事物や存在や形を視覚で認識したり、ある対象の状態や内容を観察したり知ったり判断したりするために調べるものであって、目の知覚を通して知ることである」と論じている(박선옥 2005:198)。一方、補助動詞としての「보다(pota)」は、基本的に「試行」というモーダルとしての意味を持ち、「経験」、「仮定」といった意味を持つことが議論されてきている (서정수 1996, 호광수 2003,박선옥 2005 など)。ここでは、とりわけ박선옥(2005)における「보다(pota)」の「試行」、「経験」、「仮定」の 3 つのモーダルとしての用法を取り上げてその意味を概観する。

第一に、「보다(pota)」が「試行」の意味を持つ場合である。

(3) a.가장 먼저 질문 신청하신 분부터 만나 보도록 하겠습니다. (박선옥 2005:192)
kacang mence cilmwun sinchengha-sin pwun-pwuthe manna po-tolok ha-keyss-sussnita.
(一番、最初に質問された方からお会いしたいと思います。)
b. 가장 먼저 질문 신청하신 분부터 만나도록 하겠습니다. (박선옥 2005:192)
kacang mence cilmwun sinchengha-sin pwun-pwuthe manna-tolok ha-keyss-sussnita.
(一番、最初に質問された方からお会いします。)

박선옥(2005:192)は、(3a)が示しているように、「보다(pota) 」を付け加えることで、先行する動詞「만나다(mannata : 会う)」の行為が「試して行われる」といった意味になると述べている。さらに、「보다(pota)」が用いられていない(3b)の例と比べると、(3a)では、「会う」ことを「試行」する意味が増していることが明確にわかると論じている。

第二に、「보다(pota)」が「経験」の意味を持つ場合である。

(4) a.작년에 제주도에 가 보았어요. (박선옥 2005:194)
caknyen-ey ceycwuto-ey ka po-ass-eyo.
(昨年、済州島へ行ってみました。)
b. 그렇게 큰 물고기는 잡아 보지 못했어요. (박선옥 2005:194)
kule-key ku-n mwulkoki-nun cap-a po-ci mothya-yeyo.
(そんなに大きな魚は釣ってみたことがありません。)

박선옥(2005:198-199)は、「보다(pota)」が本来、持っている「目の知覚を通して知る」という基本的な意味がさらに「経験」するという意味へ繋がると説明している。そして、「보다(pota)」が「経験」の意味を持つためには、統語的に過去のテンスで現れ、先語末語尾「-었-(ess)」と共起しなければならないという制約を持つと述べている(박선옥 2005:194)。

(3a)と(3b)の例では、それぞれ先語末語尾「-었-(ess)」と共起していることがわかる。

第三に、「보다(pota)」が「仮定」の意味を持つ場合である。

(5) a.너 그런 곳에 가기만 해 봐, 내가 그냥 안 둘 테다. (박선옥 2005:194)
ne kule-n kos-ey ka-ki-man hay pwa, nay-ka kunyang an twu-l theyta.
(お前、そっちへ行ったら、私がただじゃおかないぞ。)
b. 원자탄이 떨어져 봐라, 우린 다 죽지. (박선옥 2005:194)
wencatan-i tteecye pwa-la, wuli-n ta cwuk-ci.
(原爆が落ちたら、私たちみんな死ぬ。)

박선옥(2005:195)は、「보다(pota)」が「仮定」の意味を持つためには、2 つの条件を満たす必要があると論じている。まず、「보다(pota)」が命令形の語尾として活用されていることと、「보다(pota)」を含んだ文章が条件節になっていなければならないことである。また、後行節に感情や状況を説明する文がくると、「仮定」の意味がさらに確実になると述べている。(5a)と(5b)では、「보다(pota)」がそれぞれ命令形の語尾として活用され、「보다(pota)」を含んだ文章が条件節になっており、「仮定」の意味を持っている。また、(5a)の後行節には「내가 그냥 안 둘 테다(nay-ka kunyang an twu-l theyta : 私がただじゃおかない)」という感情を述べる文が来ており、(5b)の後行節には、「우린 다 죽지 (wuli-n ta cwuk-ci : 私たちはみんな死ぬ。)」という状況を述べる文が来ていることがわかる。

以上のように、韓国語の「보다(pota)」は、目の知覚を通して知ることを表す視覚動詞の意味から「試行」、「経験」、「仮定」といったモーダルとしての用法までその意味が広がっていることがわかる。しかし、これまでの研究では「보다(pota)」がどのような「モダリティ」としての属性を持ち、どのような特徴を持っているかに関しては詳細に考察されていなかった。次に 4 節では、「보다(pota)」が「認識的モダリティ」として分類され、その特徴を持っていることを論じる。

3．「モダリティ」について

ここでは、次節で韓国語の「보다(pota)」のモーダルとしての用法について論じる前に、「モダリティ」と「認識的モダリティ」の基本的な特徴について簡単に説明する。なお、これらの概念の詳細は李鳳(2014)を参看していただくものとし、ここでは同稿から重複を厭わず、要点だけ簡単に述べる。

3-1 「モダリティ」の性質

一般に「モダリティ(modality)」は、哲学・論理学では、「様相」、言語学では、「モダリティ」もしくは「法性」と称される (澤田 2003)。また、「モダリティ」という概念は、本来、明瞭なものではなく韓国や日本、西洋の研究者によって異なる関心事から異なる意味合い

で使われてきている。また、韓国語学における「モダリティ」の研究は、日本語学研究と同様に西洋言語学の影響を大きく受けながら、研究者によって様々な意味合いで現在まで多くの議論が行われてきている(남기심&고영근 1985,장경희 1984, 서정수 1986,이주행 2000, 박재연 2006 など)。ところが、一般に言語学において「モダリティ」とは、命題に対する話し手の態度の表明を指すものである。この大枠は研究者間で共通の認識となっているように考えられる。韓国語学において「モダリティ」は、「양태(yangthay:様態)」、「서법(sepep:除法)」のようなタームで取り扱われて研究が行われてきている。本研究では、すでに前述の際にも使っているが、言語学と日本語学で共通して用いられている「モダリティ」というタームで統一して論を進める。なお、「モーダル」というタームは「様態の」、「除法の」のような意味合いを持つが、「活用によって表示されてモダリティに関わる性質を持っているもの」として取り扱う。

Fillmore(1968)は、文の意味的階層構造を考える時に、文が「命題(proposition)」と「モダリティ(modality)」の二つで構成されるという見解を紹介している。ここで、「命題」は「発話者の外側にある客観化された世界（事柄・状況）の叙述」であるのに対して、「モダリティ」は「話し手の内側にある主観的態度の叙述」である。

(6) a. 라면을 먹자. lamyes-ul mek-ca.
（ラーメンを食べよう。）
b. 라면을 먹고 싶어. lamyes-ul mek-ko siph-e.
（ラーメンを食べたい。）
c. 라면을 먹겠지. lamyes-ul mek-kess-ci.
（ラーメンを食べるだろう。）
d. 라면을 먹어라. lamyes-ul mek-ela.
（ラーメンを食べろ。）

(6)の例に共通するのは「(誰かが) ラーメンを食べる」ことについて陳述しているということであり、差異はそれに何らかの意味をプラスしてそれぞれ表していることである。例えば、(6a)は勧誘、(6b)は希望、(6c)は推量、(6d)は命令という意味がそれぞれ現れている。そして、これらはすべてが話し手の意志、希望、推量、命令である。このように文には「客観化された世界（命題）を叙述」する部分と、その内容に対する「話し手の内側にある判断や主観的態度を表す部分（モダリティ)」の 2 つの側面があるという見解がある（中右 1979、寺村 1982、仁田 1991、益岡 1987、益岡 1991、益岡 2007、장경희 1985、서정수 1996、박재연 2006 など)。

また、中右(1979:223)は、「モダリティ」を「発話の時点において、その状況に対し話者が示す心理的反応を表現したものである」と定義している。つまり、話し手がある状況に対して示す態度であるが、その基本的な性質として 2 つを取り上げている。

第一に、「モダリティ」は話し手の心的態度であって、話し手以外の者の心的態度ではないということである(中右 1979 : 224)。「モダリティ」が、「一人称主語」という制約を持つことは多くの研究者によって指摘されている（益岡 1991、仁田 1991 など)。

第二に、「モダリティ」は、話し手の心的態度であっても、発話時の瞬間的現在時の意味に解釈されるものであって、過去時、未来時における心的態度ではないということである（中右 1979 : 224)。また、中右（1979）は、「モダリティ」は基本的に疑問の対象になりえないと指摘している。なお、これらは「認識的モダリティ」の性質であると考えられる。

さらに、「モダリティ」とは、命題がどのような存在の仕方をしているのか、命題に対して話し手がどのような心的態度を持っているのかを表す意味的なカテゴリーである。命題の存在の仕方については、必然か偶然か、可能か不可能かなどによって分けられる。また、命題に対する話し手の心的態度においては確実か不確実か、義務か許可かなどによってさらに分けられる(澤田 1993、澤田 2006)。このようにある事柄に対する知覚や感情を表したりする「モダリティ」という意味的なカテゴリーは、多くの研究者が指摘しているように諸言語に現れる普遍的な概念である(서정수 1986、김지은 1998、박재연 2006、黒滝 2005、澤田 2006 など)。

「モダリティ」の分類に関しては、「モダリティ」という細かな定義や概念に関する問題ほど、これまでいろいろな提案がなされてきている。ところが、言語学分野において 1970 年代以降、最も影響力があり、多くの研究者によって受け入れられている分類法は「認識的モダリティ(epistemic modality)」と「根源的モダリティ(root modality)」との 2 つに分ける方法である(Coates1983、Sweester1990、澤田 2006)。本稿では、韓国語学のモダリティを「인식양태(insik-yangthay)」と「행위양태(hayngwi-yangthay)」の 2 つの体系に分ける박재연(2006)の見方を支持する。なお、「認識的モダリティ」は、他の「モダリティ」とは違って、カテゴリーとしては非常に明確な特徴を持っている(澤田 1993:24)。また、命題の真実性を主張する際に、話し手による態度の保留を表すといった包括的な定義を与えることができる(Coates(1983:21))。これに対して「根源的モダリティ」は、特徴づけがしにくく、「義務的モダリティ(deontic modality)」、「力動的モダリティ(dynamic modality)」、「存在的モダリティ(existential modality)」を包括するなど、その意味範囲が広い概念である(Coates1983:21)。

本稿の主題である韓国語の「보다(pota)」のモーダルとしての用法は、命題の真実性を主張する時の話し手による態度の保留を表し、「認識的モダリティ」の特徴を持つということを示す。

3-2 「認識的モダリティ」の性質

では、「認識的モダリティ」はどのような特徴を持つのだろうか。

Coates(1983:20)は、「認識的モダリティ」の核心的な特徴として次の 3 つを取り上げて、「認識的モダリティ不可侵性の原理(Principle of the Inviolability of Epistemic Modality)」

と称した。さらに、澤田(1993、2006)は、Coates(1983)の議論に基づいて具体的に説明している。ここでは、澤田(1993、2006)があげた例を中心に「認識的モダリティ」の重要な特徴を概観する。

第一に、「認識的モダリティ」は原則として否定のスコープに入らない(澤田 2006:77)。

(7) John may not be there. (澤田 2006:77)
(ジョンはそこにいないかもしれない。)

(7)では「not」のスコープは「may」ではなく「be there」である(澤田 2006:77)。

第二に、「認識的モダリティ」は原則として過去の意味にはなり得ない(澤田 2006:78)。

(8) He might/could have come yesterday. (澤田 2006:78)
(彼は昨日やってきたのかもしれない。)

(8)の例では過去の意味になっているのは命題であり、「might/could」の表す可能性の意味は現在の意味である(澤田 2006:78)。

第三に、「認識的モダリティ」は仮定のスコープに含まれない。つまり、仮定されているのは命題であり、「モダリティ」ではない(澤田 2006:77)。

(9) You might have met him if you'd been there. (澤田 2006:78)
(あなたはそこへ行ったら彼に会えたかもしれない。)

(9)は、「it is possible that you would have met him(あなたがそこへ行ったら彼に会えたかもしれないのに)」を意味しており(澤田 2006:77)、仮定のスコープの中に「you met him」という命題は含まれているが、「might」のモダリティは含まれていない。

一方、「根源的モダリティ(root modality)」は、「認識的モダリティ」と異なって、基本的に命題に属する意味を持っている(Coates1983)。つまり、「根源的モダリティ」においては、否定は、命題にも、モダリティにもかかり得る。また、「根源的モダリティ」は、「仮定」の意味は、モダリティにかかる。最後に、「根源的モダリティ」は、過去の意味になり得る。詳しい議論は、澤田(2006:77-78)を参照されたい。

以上のように、「認識的モダリティ」は、否定のスコープに入らず、過去の意味にならず、仮定のスコープに含まれないといった 3 つの特徴を持つ。Coates(1983)は、「認識的モダリティ」には、発話時に話し手がある命題に関して主観的な判断を表すという認識的な働きがあるから、このような明確な特徴が存在すると説明している。なお、中右(1979)をはじめ、先行研究で使われている所謂「モダリティ」の概念、つまり、「発話時点における話し手の心的態度を表す」というのは、実はこの「認識的モダリティ」の特徴を表しているように考

えられる。

4.「보다(pota)」の「認識的モダリティ」としての特徴

2節で述べたように、韓国語の「보다(pota)」は、これまで動詞としての用法の他に、モーダルとしての用法もあることが論じられてきた。ここでは、「보다(pota)」が3節で述べた「認識的モダリティ」の特徴を持っていることを、論拠をあげて示す。なお、分析に用いる例は筆者による作例である。

第一に、「보다(pota)」は、発話時現在において使われて、話し手の心的態度を表す。「보다(pota)」の「認識的モダリティ」としての用法は、話し手以外の者の心的態度を表すことはできず、話し手の心的態度しか表すことができないが、この「認識的モダリティ」としての特徴を「보다(pota)」が持つ。

(10) a. 현재의 의료 시스템은 문제가 많다고 봅니다.
hyencay-uy uylyo sisuthey-un mwuncey-ka manhta-ko pop-nita.
(現在の医療システムは問題が多いと思います。)
b.*박사님은 현재의 의료 시스템은 문제가 많다고 봅니다.
*paksanim-un hyencay-uy uylyo sisuthey-un mwuncey-ka manhta-ko pop-nita.
(博士は現在の医療システムは問題が多いと思います。)

上記の(10a)で「보다(pota)」は、一人称主語を持っていることがわかる。しかし、(10b)は、「박사님(paksanim:博士)」という三人称主語の内面を表すことはできない。もし「박사님(paksanim:博士)」が主語になる場合は、述語を「보고 계십니다(po-ko kyesi-pnita : 思っていらっしゃいます)」または「보고 있습니다(po-ko iss-supnita : 思っています)」に変えなければならない。一人称主語を持っている(10a)が文法的で三人称主語を持っている(10b)が非文法的であることから解るように、「보다(pota)」は話し手の心的態度を表すという「認識的モダリティ」としての特徴を持つ。

第二に、「보다(pota)」は、疑問のスコープにはないという「認識的モダリティ」の特徴を持つ。中右（1979）は、モダリティは基本的に疑問の対象になりえないと指摘している。「보다(pota)」のモーダルとしての用法は、疑問のスコープに含まれないが、これは「認識的モダリティ」の性質であると考えられる。

(11) a.그 사람이 손해 배상을 해야 한다고 봅니까?
ku salam-i sonhay phaysang-ul ha-ya ha-ntako po-pnikka?
(その人が損害賠償をするべきだと思いますか。)
b.내가 가는게 좋다고 봅니까?

nay-ka ka-nunkey coh-tako po-pnikka?
(私が行くのがいいと思いますか。)

(11ab)の「봅니까?(popnikka?: 思いますか)」の「까?(kka:か)」は、認知作用の「봅니다(po-pnita: 思います)」を疑問するのではなく、それぞれ(11a)では「그 사람이 손해 배상을 해야 한다(ku salam-i sonhay phaysang-ul ha-ya ha-nta:その人が損害賠償をするべきだ)」という命題を、(11b)では「내가 가는게 좋다(nay-ka ka-nunkey coh-tako:私が行くのがいい)」という命題を疑問することがわかる。つまり、(11ab)では「까?(kka:か)」のスコープは、「봅니다(po-pnita: 思います)」ではなく、命題にある。

第三に、「보다(pota)」は、否定のスコープに入らないという「認識的モダリティ」としての特徴を持つ。

(12) a. 저는 그가 틀렸다고 보지 않습니다.
na-nun ku-ka thull-yeta-ko po-ci an-ha.
(私は彼が間違えたと思いません。)
b. 매일 이 정도 학습하는 것이 어렵다고 보지 않아.
mayil i cengto haksuph-hanun ke-i elyeta-ko po-ci anh-a.
(毎日これぐらいの学習するのが大変だと思わない。)

(12a)の「보지 않습니다(po-ci an-suphnita:思いません)」の「지 않다(ci anta:ない)は、判断作用の「보다(pota)」を否定するのではなく、判断内容の一部、つまり、「나는 그가 틀렸다(na-nun ku-ka thull-yeta:私は彼が間違えた)」という命題を否定している。また、(12b)の「보지 않아(po-ci an-ha:思わない)」の「지 않다(ci anhta:ない)」も、認知作用の「보다(pota)」を否定するのではなく、判断内容の一部、つまり、「매일 이 정도 학습하는 것이 어렵다(mayil i cengto haksuph-hanun ke-i elyeta:毎日これぐらい学習するのは大変だ)」という命題を否定していることが解る。つまり、(12ab)における否定の「지 않다(ci anhta:ない)」のスコープは、「보다(pota)」ではなく命題である。このように「보다(pota)」は、否定のスコープには入らないという「認識的モダリティ」としての特徴を持つことがわかる。

第四に、「보다(pota)」は、過去の意味になり得ないという「認識的モダリティ」としての特徴を持つ。

(13) a. 백신이 1 년 안에 보급될 것이라고 봅니다.
paysin-i 1nyen an-ey phokup-toi-l kes-i-lako po-pnita.
(ワクチンが一年内に普及されると思います。)
b. 백신이 1 년 안에 보급될 것이라고 보았습니다.

paysin-i 1nyen an-ey phokup-toi-l kes-i-lako po-ass-supnita.
(ワクチンが一年内に普及されると考えました。)

上記の(13a)の「보다(pota)」は、発話時現在において現れて「백신이 1 년 안에 보급될 것이다.(paysin-i 1nyen an-ey phokup-toi-l kes-ita：ワクチンが一年内に普及される。)」という命題に対する話し手の心的態度を表し、「認識的モダリティ」の特徴を持つ。しかし、(13b)の「보다(pota)」は、過去形で現れて発話時の思考内容が瞬間的現在を表していない。つまり、(13b)の「보다(pota)」の表す判断の意味は、「백신이 1 년 안에 보급될 것으로 생각했다(paysin-i 1nyen an-ey phokup-toi-l kes-ulo sayngkakhay-ss-ta：(ワクチンが一年内に普及されると考えた)」という過去時の心的態度である。

第五に、「보다(pota)」は、仮定のスコープに含まれないという「認識的モダリティ」としての特徴を持つ。

(14) a. 앞으로 열심히 노력한다면 가능한 목표라고 봅니다.
aph-ulo yelsim-hi nolyekha-nta-myen kanung-han mokphyo-lako po-pnita.
(これから一所懸命に努力すれば、可能な目標だと思います。)
b. 코로나가 종식된다면 경기는 금방 좋아질 것이라고 봅니다.
korona-ka congsik-toy-ntamyen kyengki-nun kumbang cohaci-l kes-ilako popnita.
(コロナが終息すれば、景気はすぐよくなると思います。)

(14ab)が示しているように、(14a)では仮定のスコープに「가능한 목표이다(kanunghan mokphyo-itao:可能な目標だ)」という命題は含まれているが、「보다(pota)」は含まれていない。同様に(14b)でも、仮定のスコープに「경기는 금방 좋아질 것이다(kyengki-nun kumbang cohaci-l kes-ita：景気はすぐよくなる)」という命題は含まれているが、「보다(pota)」は含まれないことが解る。このように「보다(pota)」は仮定のスコープに含まれない。

以上のように、韓国語の「보다(pota)」のモーダルとしての用法は、一人称主語といった人称制限を持ち、疑問のスコープに含まれないこと、否定のスコープに入らないこと、過去の意味になりえないこと、仮定のスコープに含まれないといった 5 つの点から「認識的モダリティ」としての特徴を明確に持つことが明らかになった。

５．終わりに

本稿では、動詞「보다(pota)」のモーダルとしての用法が「認識的モダリティ」としての特徴を持っていることを示した。そして、方法としては、従来の研究における指摘と、主にCoates(1983)の「認識的モダリティ不可侵性の原理」を用いて、「보다(pota)」に「認識的モ

ダリティ」としての特徴があることを、5つの点をあげて示した。まとめると以下のようである。

第一に、「보다(pota)」は一人称主語でなければならないという人称制約を持つ。

第二に、「보다(pota)」は疑問のスコープに含まれないという特徴がある。

第三に、「보다(pota)」は否定のスコープに入らないという特徴がある。

第四に、「보다(pota)」は過去の意味にはなり得ない。

第五に、「보다(pota)」は仮定のスコープに含まれない。

今後、次の 2 つのことが課題として残っている。まず、「認識的モダリティ」として「보다(pota)」が持つ語用論的な機能(pragmatic function)を明確にする必要がある。「보다(pota)」の「認識的モダリティ」の語用論的機能を明らかにするために、「보다(pota)」が話し手の心的態度を表し、断言を和らげる装置として機能している点に注目したい。つまり、発語内の力(illocutionary force)を弱めるヘッジ(hedge)として機能していることを論じる必要がある。ヘッジがポライトネス・ストラテジー(politeness strategy)の一つであるからである。特に、話し手が命題に対する自分のコミットメントを減らすため、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー(negative politeness strategy)として「보다(pota)」が使われていることを検証したい。また、「보다(pota)」における意味変化の問題を考察する必要性がある。「보다(pota)」には、動詞としての用法に加えて「認識的モダリティ」としての用法があることを示した。しかし、本稿では動詞としての「보다(pota)」と「認識的モダリティ」としての「보다(pota)」との意味関係を明らかにするところまでには至らなかった。この「보다(pota)」における意味論的かつ語用論的変化に関する問題を考察するのは今後の課題に残したい。そして、Hopper&Traugott(1993/2003)の「文法化(grammaticalization)」という概念を用いて、「보다(pota)」の動詞としての意味とモーダルとして意味が持つ変化の性質を明らかにしたい。

付記

本稿の 3 節で用いた「モダリティ」と「認識的モダリティ」に関する説明の部分は、筆者が北海道大学大学院国際広報メディア研究科に提出した博士論文の 4 章の内容を基にして加筆・修正したものである。

［ローマ字表記］

本稿で用いる韓国語のローマ字表記は、「The Yale System of Romanization（Martin、Samuel.E.(1967)）に従う。また、用例における「*」の記号は、非文法的であると判断される場合に用いる。

［用例における文法性の判断］

韓国語の用例に対する文法性の判断は、基本的に筆者の直観によるものである。しかし、

一層の正確性を期すために複数の韓国語母語話者に文法性の判断を依頼して確かめている。

［謝辞］
本稿の英語の要旨においては、北海商科大学のニールセン・ブライアン先生に大変有益な教示をいただいた。ここに記してお礼を申し上げる。

参考文献

Coates, Jennifer(1983) *The semantics of the modal auxiliaries*, London：Croom Helm. [澤田治美訳(1992)『英語法助動詞の意味論』、研究社。]
Fillmore,C.J.(1968)The case for case. *Universals in Linguistic theory*, ed.by Emmon Bach and Robert T. Harms, 1-88. New York:Holt,Rinehart&Winton.
Hopper, P. J. and Traugott, E. C.(1993,2003)*Gramaticalization*, Cambridge:Cambridge University Press.［日野資成訳(2003)『文法化』、福岡：九州大学出版会。］
Palmer, F.R.(1979,2001)*Mood and Modality*, Cambridge：Cambridge University Press.
Palmer, F.R.(2000)*Modality and the English Modals*, London and New York: Longman.
Sweetser, Eve(1990) *From Etymology to Pragmatics*, Cambridge:Cambridge University Press. [澤田治美訳(2000)『認知意味論の展開』、研究社。]
李鳳(2014)「『思う』と『생각하다(sayngkakhata)』の日韓対照研究―ヘッジとポライトネスの観点から―」、北海道大学大学院国際広報メディア研究科博士論文。
黒滝真理子(2005)『Deontic から Epistemic への普遍性と相対性』、くろしお出版。
澤田治美(1993)『視点と主観性』、ひつじ書房。
――――(2006)『モダリティ』、開拓社。
寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』、くろしお出版。
中右実(1979)「モダリティと命題」、『英語と日本語と』林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会、pp.223-250、くろしお出版。
仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、くろしお出版。
益岡隆志(1987)『命題の文法』、くろしお出版。
――――(1991)『モダリティの文法』、くろしお出版。
――――(2007)『日本語モダリティ探求』、くろしお出版。
고영근(1983)『국어문법의 연구』, 탑출판사.
남기심&고영근(1985))『표준 국어 문법론』, ,탑출판사.
김지은(1998)『우리말 양태용언 구문 연구』』,한국문화사.
박선옥(2005)『국어 보조동사의 통사와 의미 연구』, 역락.
박재연(2006)『한국어 양태어미 연구』, 태학사.
서정수(1996)『수정증보 국어문법』, 한양대학교출판부.
서정수(1986)「국어의 서법」,『국어생활』, 7, pp.116-130, 국어연구소.

손모세돌(1996)『국어보조용언연구』,한국문화사.
이기동(1988)「조동사 '보다'의 의미연구」,『애산학보』, 6 巻, pp.225-251.
이수련(2013)「동사 '보다' 의 연구-시각 동사와 인지 동사로서의 특징을 중심으로-」,
『한민족어문학』,65 巻, pp.89-113.
이주행(2000)『한국어 문법의 이해』, 월인.
장경희(1984)『현대국어의 양태범주에 관한 연구』,서울대박사학위 논문.
최현배(1937,1991)『우리말본』, 정음사.
한글학회 지음(1992) 『우리말 큰사전』, 어문각.
호광수(2003)『국어 보조용언 구성 연구』, 역락.